

 書評

三宅 薫 著

行って見て聞いた 精神科病院の保護室

今村 弥生

サービスの本質は隠れた所にこそあぶり出される

本書はタイトルが示す通り、著者が一精神科看護師として、見学可能な日本の精神科病院に足を運び、保護室の構造、あり方を研究した労作です。大判の本の大きな帯には、中井久夫先生からの「こんなにきめ細かな保護室の記録は、世界に例がないんじゃないか？」とのコメントがあります。確かに、「写真で見る保護室」の章において、全国 35 か所の精神科病院で撮影された大量の資料写真が配置され、詳細に解説されている様を見ると、建築関係の本に近いような印象です。しかし、単なる保護室のカタログにとどまらず、著者による各保護室の印象記や、各施設の看護師による意見(自施設の保護室の良い点、改善すべき点)も記されており、それが最終的に「保護室における生活の援助とは」という著者の意見に結び付きます。

現状には理由がある

「流行る飲食店のトイレはきれいに清掃されている」という法則があるのだそうです。トイレのような、表からは見えない面にも気配りがあるかどうかで、そのお店の客への姿勢が表面的なものか、真に近いかが分かってしまう。それは精神科ケアと保護室の関係とも似ています。サービスの本質は、奥に一段引っ込んだ隠れた所にこそ、あぶり出されるのではないのでしょうか。

壁の材質、窓、換気、間取り、患者さんから見えるもの……病院の中の奥まった一室から、なんと多くの議論すべき話題が出てくることでしょう。本書をめくっていくと、看護師とサービスユーザーである入院患者たちの多くの声が背景にあって、それぞれの保護室のアメニティや形態になったことが推測されます。

なかでも最も印象深かったのは、保護室での食事の際に使われるテーブルです。小さなちゃぶ台、手製の木製の机、一般的なテーブルを食事の時だけ出

し入れする方法、薬品の空きダンボールにお膳を置く方法、または保護室専用のダンボールテーブル(既製品)を使用しているなど……。本書を読むまでテーブルひとつにこのようなさまざまな方法があるなんて知りませんでした。著者はダンボール箱に布を巻いている施設に注目しています。「薬局からもらって来た薬品名が書かれたままのダンボール箱でご飯を供するのはわびしいですが、そこに布を張って少しでも食卓に近づけようとする心遣い、これぞ看護の視点ではないでしょうか」と感心しています。

保護室のテーブルは、なかったからといって、責められるものではないかもしれません。しかしこの調査結果を読んで、ユーザーのニーズに目を向け、何もないところにテーブルを作り出すことが、医療看護のサービスであり、私たちが研究すべきことなのだということを改めて思いました。

アイディアの宝庫

最終的にベストな保護室とは何か、結論を出していないところも本書のよいところだと思います。1 人のナースがさまざまな病院に飛び込み、そこで「保護室」という場に限定して調査を行った。さらにそこから、精神科看護全体に思いを巡らせている視点にも価値があると思います。

保護室を通して精神科ケアの広範な世界をのぞき見ることができる本書を、私は精神科医療に関係する人に薦めています。著者の視点を借りて、自分の勤務する病棟、病院に視線を巡らせてみたら、新しいアイディアが浮かんでくるかもしれません。ただ、私が医師のせいか、ぜひ次は看護師以外の職種の意見も聞いてみたい気がしました。引き続き、今後の「保護室研究」に期待しています。

(東京都立松沢病院・精神科)

●A4 152 頁 2013 年 定価：本体 2,940 円＋税 医学書院刊